ール、タイから多数の外国人が滞在して雪を楽しんでいました。出会った香港人は、家族で５週間滞在する予定と言っていました。ホテル代は3万円からと普通の日本人には長期泊まれない価格で、コンビニには、1億円を超える小さなリゾートマンションや別荘を紹介するりっぱな不動産ブックレットが山積みになっていました。わずか30年前には、日本人が海外で金持ちといわれたことがまるで嘘のような、浦島太郎の気分を味わいました。

元院生からは、ポスドクでスイスの大学に滞在した際に、月に70万の手当てをもらったが、それでも家族4人で生活するにはぎりぎりの額だったと聞きました。最近、海外学振でポスドクをする若い研究者や在外研究に応募する大学教員が減っていることは、感じていましたが、その大きな理由の一つが支給される費用が安すぎて生活できないとは、泣くに泣けない状況です。

景気の悪い話ばかりしていてもしょうがありません。気分を変えて、われわれ環境生態学科の教員も研究を通じて基礎科学の再興に尽くしたいと深く感じた次第です。

環境政策･計画学科のこの一年

香川　雄一
環境政策・計画学科長

4月に44名の新入生を迎えて、2018年度の学科運営が始まった。同じく4月には、新しい教員として、環境社会学を専門とされる平岡俊一助教が着任された。前年度までは北海道で勤務されていて、豊かな自然環境の中で教育と研究に従事されており、自然再生エネルギーの普及を目的とした環境NPOでの経験も豊富とのことである。学科学生が希望する研究テーマの受け入れや、環境政策にかかわる地域貢献活動において、ご活躍を非常に期待できるスタッフに加わっていただけることになった。

今年度の特筆すべき出来事として、11月に環境科学部の付属施設として、湖沼流域管理研究センターが設置されたことを挙げておきたい。2018年は滋賀県と中国の湖南省が交流を始めて35周年という記念すべき年に当たっており、11月に湖南省長沙市で開かれた式典には、学科から井手慎司教授と林宰司准教授が参加した。一昨年度から研究交流を継続している、中国の湖南師範大学の研究者を、今年度は2回にわたってお迎えし、4月には本学内で「湖沼保護管理・ガバナンスに関する国際学術シンポジウム」、2019年1月には大津駅前の環びわ湖大学・地域コンソーシアムで「琵琶湖・洞庭湖湖沼流域保護管理保護制度研究会」を開催した。2月には日本国内の大学等に勤務する、中国の環境問題を専門とする研究者に参加していただき、彦根駅前の大学サテライトプラザ彦根にて「中国湖沼流域管理政策研究会」を開催した。いずれの研究会においても、湖沼流域管理に関する環境政策をめぐって、琵琶湖と中国の湖沼についての研究比較とともに、現状と課題を検討した。今後も研究や教育に、湖沼流域管理研究センターの活用を見込むことができる。これらの一連の研究交流活動に尽力された林准教授は、2018年度の本学優秀職員として表彰された。

9月には村上一真准教授が、「環境科学会 2018年度 優秀研究企画賞（富士電機賞)」を受賞された。若手研究者による創意ある優秀な研究企画に対して、環境科学分野における新規性や注目度、社会的有用性、これまでの実績に基づく発展性などの観点からの審査の結果により表彰されたもので、受賞対象となった研究企画は、「温暖化抑制施策の効果波及メカニズムの分析：市民共同発電と緑のカーテンの比較検証」であった。まさに環境政策・計画にふさわしい研究テーマであるといえよう。村上准教授は今回を含め、3年連続で各種の学会賞を受賞されている。

７月に本学の特別表彰の授与式があり、大型研究の推進に顕著な貢献をした、平山奈央子助教と村上一真准教授が、本学科から受賞された。

本学科では、研究室に配属される3回生と4回生だけでなく、1回生と2回生も少人数の個別クラスを設置して、各学年の学生が自分の興味関心から研究につなげていけるような、調査の準備としての課題に取り組んでいる。1回生は後期の授業「政策形成・施設演習」の一環として「学外現場演習」の課題があり、授業期間中に環境関連のイベントに参加するなどして、学期末に報告会を実施した。2回生は「政策計画基礎演習」の授業で、前期は文献報告をレポートにまとめ、後期は自分の関心のあるテーマに必要なヒアリング調査を2名以上に実施して、結果をレポートにまとめるとともに口頭で発表した。いずれ卒業論文での現地調査や、就職活動における自己アピールに役立つことであろう。

なお、1回生には前期の「人間探求学」の授業の中で、オープンキャンパスの準備に参加して、高校生に対しての学科の紹介や、企画展示の準備を体験している。自分の進路選択の結果を振り返るとともに、現在の所属学科についてどのように説明すべきかを考える機会となった。1回生だけでなく他の学年の学生も、自らが主体的に地域のイベントやボランティア活動に参加している事例もあり、滋賀県や琵琶湖、滋賀県立大学環境科学部といった地域の資源を活かして、自らのスキルアップにつなげているようである。

3回生は12月の着手発表会を終えて、本格的な就職活動に突入した。4回生は1月末の卒業論文の提出と2月初めの卒論審査会を経て、37名が卒業することになった。データを集めるために調査すること、調査結果を分析すること、論文を執筆することだけでなく、大人数を前にして発表して質疑応答ができること、審査コメントを受けて論文をよりよくするために文章を修正できること、のいずれもが社会人の基礎力として役立つであろう。

ここ数年、学科事務員の変動があり、教員の異動も多く、学科業務が混乱することもあった。今年度は事務員の増田さんが、年間スケジュールを把握された上で、1年を通じて勤務していただいたので、滞りなく学科業務を遂行できたと思う。学部長控室のスタッフの皆様とともに、学科スタッフの増田さんには日頃からの学生と教員への支援に感謝したい。

環境建築デザイン学科のこの一年

村上　修一
環境建築デザイン学科長

教員メンバーについては、昨年度に引き続き、今年度も変化のない一年であった。欠員となっていた1名については、下半期、公募による選考が順調に進み、来年度4月より新たなメンバーを迎えることとなった。しばらくこの体制が続くことになるであろう。学科内に昨年度立ち上げた「カリキュラム検討委員会」では、必要な講義科目を精査するとともに、3回生後期に選択科目として「設計演習4」を新設することを決め、実践教育の充実を図ったところである。

今年度の卒業研究では、15名の学生が論文を、32名が制作を行った。最終の発表会では、5名のゲスト講評者をお招きし、熱のこもった議論が交わされた。今年度は、論文、制作ともに、底上げのなされた感があった。「目的から結論に至るまでの論証性に優れ、かつ、環境建築デザインの新たな知見を得ており、社会に対するインパクトを有する研究（作品）をEA賞として選定する」こととなっているが、相当数がこの選定根拠に合致するのではないかと思わせるほどであった。なお、ゲスト講評者の一人、大井鉄也氏は本学科の卒業生である。昨年度に引き続き、新進気鋭の建築家として卒業生をお迎えできたことは喜ばしい。

また、「木の上設計グランプリ2018」準優勝をはじめ、設計競技等における学生作品の受賞、教員による実施設計作品等の雑誌掲載、教員が主導する研究室プロジェクトによる基本設計等のメディア発表、地域における制作活動・展示活動・ワークショップの実施など、今年度も、教員や学生の学外における多方面の活躍が見られた。「地域に根差し、世界に拓く」という本学科の特徴は、今年度も確実に受け継がれ、確かなものとなっているようである。

生物資源管理学科のこの一年

泉　泰弘
生物資源管理学科長

学部長裁量経費を使わせていただき、学科ホームページのリニューアルを行った。ウェブ作成業者との話し合いにより、まず本学科の学生を対象に現行ホームページの印象についてのアンケートを実施し、その結果を受けて「学科の顔」ともいえるトップページのデザインを中心に刷新することとなった。新トップページ、および追加したサブページは魅力的なものに仕上がったと考えるが、中身の充実にまで十分手が回らなかったのは心残りである。

７月21・22日のオープンキャンパスでは「学科長が語る生物資源管理学科の魅力」というメニューが新たに加わり、来場者に向けて１日３回×２日の計６回話をすることになった。同じ内容を何度も繰り返すというのは思ったよりも難しいことであったが、回数をこなす内に要領が分かってきてアドリブも入れられるようになり楽しかった。来年度はもっと興味を引くような中身にしたい。もちろん私以外の学科教員にも展示・体験コーナー、圃場見学ツアーなど魅力的なメニューを提供していただいた。（ただし、両日とも猛暑の影響で午後の参加者が激減していたことから、とくに屋外でのイベントは時間帯の変更を考えるべきかもしれない。）

このような試みにどれほどの効果があったのか定かではないものの、2019年度入学試験（一般選抜）の志願倍率は前期日程が前年度の2.2倍から2.6倍、後期日程が同じく10.3倍から13.3倍へとともに増加した。とくに2018年度は全学部全学科を通しての最低かつ唯一の３倍未満であった前期の倍率が改善したことに安堵した。しかしながら、冷静に見ればブービーメーカーがブービーになっただけのことであるし、３倍に達していないことは一緒。とりあえずそこからの脱却を目指すべく、高校訪問は学部としての割り当て数をこなすにとどまらず、機会があれば足を運ぶなど、より積極的にアピールを行っていく必要を感じている。

全国農学系学部長会議（春および秋）、その東海・